



平成 29 年 7 月 12 日(水)定例会要旨

垣間見た色丹島

手稲郷土史研究会会員 村元 健治

2013 年(平成 25)と 2016 年(同 28)の 2 回、千島歯舞諸島居住者連盟の会員として北方領土の色丹島を「ビザなし交流事業」の自由訪問で訪れた。

訪問時間は極めて短時間で、正に垣間見たに過ぎないが敢えて報告したい。結論から言えば、島の自然は手つかずの美しいものの、人々の暮らし・生活は港湾、道路などのインフラの整備が遅れ、ちょうど高度経済成長時代前の昭和 30 年代前半の北海道のような光景が見られた。



2013 年の訪問先は、アナマ、イネモシリ、シャコタン、マタコタンを、2016 年の時はノトロ、アイミサキをそれぞれ訪ねた。

アナマは、北欧のフィヨルドを思わせるような狭い湾の奥まった所にあった。湾の両岸はシコタンマツなどの針葉樹とジュータンを敷き詰めたようなチシマザザに覆われ、うっとりするような光景だった。

しかし、港の棧橋近くに来ると、廃船がアチコチに見受けられたり、住民が捨てたゴミが湾内に迫っていたりするなどの光景が見られ、興ざめする思いだった。

イネモシリは、1992 年(平成 4)に香港の企業が、ゴルフ場、スキー場などを備えた一大レジャー基地を作るため 50 年間借地をするという計画を出したほどの所だけあって(この計画は後にキャンセル)、風光明媚な所だった。静かな波打ち際に大量の昆布が打ち寄せられていたのには、驚かされた。

シャコタンは、島のメインの街だけあって、それなりの賑わいを見せていた。ここでも日本人墓地を訪れ、先祖の墓に献花をしたが、意外だったのは我が先祖の墓の隣に「クリル人墓地」というのがあったことだ。

1884 年(明治 17)に、千島列島北端のシュム島、パラムシロ島に住んでいたクリル人(チシマアイヌ)83 人が、当色丹島に強制移住させられたが、気候風土、病気等により相次いで亡くなったということがあり、それらの人達が埋葬されたところだった。



(写真はマタコタン)

街中にある幾つかの商店の一つに入ったが、野菜、果物を含めて結構な品揃えだった。

マタコタンは、遠くからの眺め だったが、山と入り江が美しく、これまたうっとりするような光景だったが、その近くに何十年も前から燃え続けているゴミ捨て場があって、見たくもないものを見てしまった感じがした。

ノトロとアイミサキは、悪天のため2時間程度の上陸しか出来なかったが、イネモシリ、マタコタンと同様、日本人が住んでいたという形跡がほとんど見られず、高山植物とチシマザサに覆われる無人の荒野と化していた。ノトロでは戦車の砲身らしいものとトーチカを見るなど今もなお戦争の遺物が残っていて衝撃を受けた。とにかく、島の美しさとその歴史を改めて偲ぶ有意義な旅だった。(記:村元)

択捉島 ちょっぴり 散策

手稲郷土研究会相談役 一ノ宮 博 昭



平成29年6月7-11日の日程で、北方領土ビザなし交流第2陣の団員として択捉島行きの機会を得た。

いかにも大旅行のような印象を与えるかもしれない

が、国後島・古釜布(ふるかまっぷ)が荒天のため入域手続きができず、根室沖で1泊を余儀なくされ、往路1日、帰路1日の距離のため、上陸はわずか1日だけだった。わが国固有の領土といいながら、現実、そこは完全な外国だった。

団員は島民2、3世らを中心に、総勢61人。この中に鈴木宗男や内閣府、外務省 経産省、衆議院調査局、道領対本部職員らが加わった。

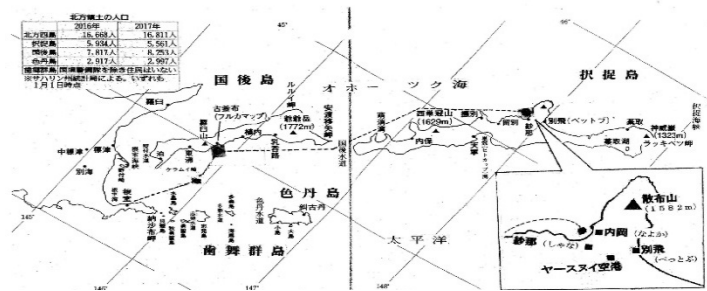
団員を乗せたチャーター船「えとぴりか」(1100t)は、濃緑の海を割って北上する。潮目が立つといわれる国後水道は、オホーツク海と太平洋の水温に差があるため、荒れることで有名という。これが、うそのようにないでおり、団員は終日、デッキでシャッターを押し、談笑を楽しんだ。中でも、オホーツク海に沈む夕日は絶景だった。そして、右舷からは択捉島の島陰から昇る月も撮影できた。

目覚めると内岡(なよか)港外。日本時代にはクジラの加工場があったという。優しい稜線の散布(ちりっぷ)山(1582m)は残雪が幾筋も見え、そのまま海に流れ落ちている。構造物はまったくない。誰かがいった。「まさに原始の世界だ。これこそ世界遺産として残すべきではないか」。ほとんどの団員が幼少期に頭に刻んだ故郷の山々をよみがえらせたのは間違いなかった。

いったん、はしけに移乗し上陸する。そのはしけに捕獲したばかりの「オヒョウ」が2匹ぶら下がっていた。優に大人の背丈を越す大きさだ。

バス2台とマイカーに分乗し幹線を走り出して驚いた。まるで完成したばかりの舗装路に見えた。6年前、国後島での砂利道体験とはまるで違った。紗那(しゃな)の文化会館に案内された。これも完成したばかり。同会館の交歓会では、日本側から社交ダンスの披露と指導会、ロシア側から少年少女による民族舞踊などが披露された。

丘をひとつ越えた別飛(べつとぶ)でも新装なった幼稚園を見学した。舗装路はまもなく切れた。作業用のダンプがひっきりなしに砂ボコリをあげていた。紗那の町はずれに日本人墓地があった。島内に墓地はたくさんあるのだが、ロシア側が入域を許可しないため、墓参団はやむなく上陸した日時を刻んだ碑を紗那墓地に立て、慰霊を続けてきた。ここでは日口



が混在していた。

日本人のお墓は、細長い自然石を立てて墓標にしており、どこの誰とも不明だった。簡易的に見よう見まねのお経を朗読した。ツアー最大の行事は家庭訪問。1家庭に3人程度が割り振りされる。小生は仲良し2家族に6人で訪問することになった。

アパート前まで舗装路は続いていた。送迎の車も、左ハンドルできれいに磨き上げたロシア車で、国後の中古日本車とはかなりの違いを見せていたが、建物はペンキを塗っているため、遠目にはきれいだが、かなりの老朽建物だ。衛星放送のアンテナばかりが目立ち、コンクリもあちこちで崩れていた。室内はかなりの広さ。

テーブルに置ききれないほどのごちそうが並んでいた。なにしろ会話ができないため「おもちゃ」「ハンカチ」「キャラメル」と単語を並べ、土産を手渡した。どうぞ召し上がれと何度も促された。6人の通訳が交代でわずかの時間だが巡回してくれる。そこで「ご主人は」と聞いた。すると「10数年前に、意見がすれ違うようになったので、出してしまった」といった。この国では女性上位が日本以上に浸透しているのかと思った。

共同経済活動や日ロ混住についても質問したが、帰ってきた返事は「そんなこと考えたこともない」という素気ないものだった。一般家庭の認識とは、近くの隣人同士なので、これからも濃密な交際を続けていきたい」と語ったその程度のものかも知れない。

市街の中心地にあるカフェで住民交流会が開かれた。冒頭あいさつに立った地区行政委員会の議長も女性だった。「経済活動の中身は政府の決めることなのでとやかく言えないが

民族衣装に身を包んだジャンボな女性によるアカペラ合唱を聞き、返礼に「ふるさと」の大合唱と日ロ入り乱れてのダンスに興じた。

一行は「えとぴりか」に戻り、翌朝、国後沖で解団式を終え下船した。

解団式では、住民交流で大きな成果を上げられたという前向きな発言のほか、やはり言葉のカベが厚かった、十分気持ちが伝えられなかったとの発言もあった。

また、大真面目なところでは、政府首脳は共同経済活動の取り組みを返還運動の足掛かりにしたいとの意向のようだが、大判ふるまいをするあまり、返還運動が影をひそめるだけでなく、棚上げになってしまうのではないかとの懸念も出た。この経済活動なるものが、どのような形で結実するのか、そしてどう展開することになるのか、

今後の推移を見守りたいものだ。（記：一ノ宮）



**[写真説明]・散布山をバックに筆者
(内岡港外、「えとぴりか」から)**

